

# 天然ブリ仔資源生態調査（抄録）

村山達朗・北沢博夫

日本栽培漁業協会が行なう天然ブリ仔資源生態調査の一環として、ブリの分布・生態・資源動向を究明するため下記の調査を実施した。

1. ブリ稚仔の分布調査（試験操業）
2. 標識放流調査
3. 魚体測定調査
4. 島根県内の漁獲統計調査と漁況調査
5. 対馬海流域のブリ資源調査

詳細は“日本栽培漁業協会研究資料 No.41, 1988”に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

## 結 果 の 概 要

### 1) ブリ稚仔の分布調査

昭和62年5月27・28日に大型稚魚ネットによるブリ稚仔の分布調査を行なった。その結果、体長3～4cmの個体が1藻あたり50～250尾程度採集されており、昭和57年の水準には及ばないものの昭和58, 59年並の来遊量と推定された。

### 2) 標識放流調査

浜田市沖2mileの人工礁設置海域で昭和62年10,11月の2回、計1,205尾の標識放流を行なった。放流魚は10月分は日裁協の人工種苗を中間育成したもので、11月分は養殖業者から購入した養殖魚である。

10月放流分は昭和63年1月31日現在の再捕率は2.0%である。11月放流分の再捕率は2.6%である。

今回の標識放流の目的は、南下期における移動範囲と、人工礁への滞留率ないしは滞留時間の推定にあった。南下期の移動範囲としては東シナ海まで想定していたが今回は山口県以西からの再捕報告はなかった。過去には佐渡島で放流したものが山口県で再捕されており、今回の移動範囲は予想より狭いものである。

### 3) 魚体測定調査

魚体測定は島根県西部の浜田港及び東部の大社港で行なっている。今年度より、年齢査定資料を得るため採鱗を行い、月1回は魚体を購入して精密測定並びに、鱗・鰓蓋骨・脊椎骨の採集を行なった。

浜田港における昭和61年級の4月から7月までの体長（尾叉長）組成の推定は漁獲量が少なく銘柄別の引き延ばしができなかったため、月平均3回の調査では、基本的に全数測定を行い、それを月別に集計した。8～11月の昭和62年級の体長組成は銘柄別測定により推定を行なった。

昭和62年4月23日に浜田の定置網で漁獲された親魚を精密測定したが雄は熟度指数（生殖腺重量÷体重×100）が4.9、雌は2.9であった。卵巣卵は最大で0.8mm程度で、ブリの放卵時の卵径は1mmを越えるため産卵まではまだ時間があり、産卵場（東シナ海？）への南下群と思われる。

大社港（日御碕周辺漁場）における釣り漁獲物を5月に測定したが、雄（FL607～625mm）は全て成熟していた（精巣重量154～278g）。雌のFL607～622mmは未熟（卵巣重量17～24g）、FL635～652mmは成熟していた。このうち1尾は放卵直後の個体で卵巣がだぶだぶとなり、透明な完熟卵が流れだしていた。これより、日御碕周辺海域で産卵が行なわれていることが示唆される。

### 4) 島根県における漁獲統計調査と昭和62年の漁況

〈0才魚（モジャコ）〉 養殖業者による採捕は6月10日に解禁され、ほぼ6月中に採捕を終了している。モジャコの主漁期は'82年（6月上旬～中旬）以来遅れ続け、昨年は7月下旬となっていたが今年は'83年程度の漁期であった。

ツバスの漁況は富山湾など日本海北部に比べ当初は低調であったが、9月下旬から隠岐諸島～島根半島付近で、旋網を中心とした漁が始まった。その後、漁場の南下は遅れていたが10月下旬より、県西部から山口県にかけても本格的な秋漁が始まり、最終的には平年（昭和56～61年の平均）の154%と比較的好漁であった。

〈1才魚（'86年級）〉 全域で各漁業種とも不漁であり、最終的に平年の32%の漁獲量であった。

〈2才魚以上〉 冬季のブリは不振であったが、3～4月に産卵南下群と思われる8kg前後（FL75～80cm）のものがまとまって漁獲された。同時期に3kg前後の2才魚が島根半島で多獲されたが詳細は不明である。最終的には平年の82%とやや不漁であった。

### 5) 対馬海流域のブリ資源

#### a. 対馬海流域の漁業実態

1955年以降の対馬海流域（青森～鹿児島）、日本海（青森～山口）、九州西岸（福岡～鹿児島）の漁獲量は、各海域とも約3年の周期が認められ、特に1960年代の後半から周期性が明瞭となっている。日本海と九州西岸域を比較すると、周期に1年のずれが認められ、日本海のピークの1年後に九州西岸域のピークが現れている。

日本海では1960年代～1970年代にかけて旋網・刺し網による漁獲量が急激に増加している。また、1980年代にはいと釣りによる漁獲量が激減している。九州西岸では釣りと定置網が漁業の主体であるが、1970年代以降旋網による漁獲量が増加している。

漁獲量の周期性が明瞭に現れ始めた時期と旋網・刺し網の漁獲量が増加した時期は一致する。一般に、旋網・刺し網は若齢魚を主体に漁獲しており、卓越年級を若齢期に食いつぶす形で漁業が行なわれている様子が示唆される。

#### b. 漁獲物の年齢組成

日本海では1960年代～1970年代の始めにかけて急激に0才魚の比率が増大し、その後は組成に大幅な変化は見られない。

九州西岸の年齢組成に関する資料は現在のところ極めて乏しい。長崎水試の週報をもとに1985年の長崎県における釣り（主に飼付）と定置網の漁獲物の年齢組成（尾数）を推定したが、釣りでは1～2才魚を、定置網では3才魚以上を漁獲の主体としている。

また、唐津魚市の銘柄別漁獲量（佐賀水試内部資料）の年齢組成（重量）が九州西岸を代表すると仮定して日本海の組成と比較してみると、日本海では0・1才魚が、九州西岸では1才魚以上が漁獲の主体であり、このことが2海域の漁獲量のピークのずれを産んでいると考えられる。